

人文科学的視点からの環境論 (2)  
——桑子敏雄『環境の哲学』に寄せて——

湯 浅 弘\*

An Essay (2) on 'Environment' from Kuwako's Cultural  
Point of View in *Philosophy of Environment*

Hiroshi YUASA

要 旨

本論文は、『環境の哲学』に代表される桑子敏雄の最近の論考を、現代の人文科学的な環境論の一典型として読み解く試みである。桑子の基本的な視点は、主として中国や日本の伝統思想という知的遺産を手がかりとして環境をめぐる諸問題を考察しようとするもので、その考察の基底には、西洋哲学においては軽視されてきた身体性や空間性に主眼を置いて人間存在の成り立ちを捉え直す哲学的な人間存在論が据えられている。そのため、現代のアクチュアルな環境問題を論じる桑子の所論は、環境問題を論じる際に前提とされる既存の諸概念の批判を自ずから含む形で展開されている。哲学の社会的機能の一つとして、既存の諸概念の批判的吟味と当該問題に関する新たなアイディアの提示が挙げられるが、環境問題に関わる桑子の論考は、哲学のこうした社会的機能を示す一つの範例になりえていると言ってよい。本論文は、以上のような点を中心に、人間存在の基礎的諸条件を踏まえた桑子の哲学的な環境論の基本的な構えを浮かび上がらせようとするものである。

キーワード：空間，身体，風景，ローカル，グローバル

---

\*助教授 人間学・哲学

## 1 はじめに

人間環境をめぐる諸問題に関して、現代の人文科学の視点からはどのような議論が提出されているのか？その基本的な論点、構えといったものはどのようなものなのか？また、そうした議論の射程、あるいは可能性はどのように評価されるべきであるのか？本論文は、このような問題意識から人文科学的な環境論の論点整理を行うという企図の一環として書かれたものであり、現代における人文科学的環境論の一端を紹介した拙論「人文科学的視点からの環境論(1)」<sup>1)</sup>の続篇である。

前論文で、筆者は、現代日本の哲学者今道友信の『エコ・エティカ』を取り挙げ、その基本的論点を浮かび上がらせる試みを行った。そこで確認した事柄を列挙すれば、

- (1) 20世紀中葉以降、いわゆる先進国では人間を取り巻く環境の激変が生じたということ。
- (2) その環境の激変の一面は、科学技術の所産である技術連関が人間環境の重要な——場合によっては、主要なと言えるほどに重要な——構成要素となったと捉えられるということ。
- (3) また、そうした環境変化は、人間の行動様式、生活様式を著しく変容させる圧力として働き、その圧力は、現在なおこれまで以上の力で機能しているということ。
- (4) そのようにして生じた行動様式や生活様式の変容は、生活の利便化、効率化の進展として肯定的に評価することも可能だが、他面、そうした動向は、時間性を本質とする意識、精神、ないしはこころの成り立ちを危うくするということ。
- (5) そして、精神性やこころの成立に人間性や倫理の根幹がある以上、危機に直面している人間性の再構築を倫理の再構築という形で試みる必要があるということ。

凡そ以上の通りである。

前論文での確認事項をこのように列挙してみれば明らかなように、今道の所論は、20世紀に生じた人間環境の激変が人間性の危機をもたらしたと見るものであった。今道が主題化していたのは、環境との関係においてはじめて存立し得る人間の人間性——つまり、人間の人間たる所以——それ自体の危機であり、その環境論の特色の一つは、環境問題を扱うのにこうした人間学的な視点が採られていた点に求められる。環境との強い関わりにおいて人間の在りよう（存在の仕方）を主題化するという点において、今道の所論は、すぐれて人文科学的と言ってよい環境論と見なすことができる。

環境と人間との関係に関する哲学的な洞察を基底として環境問題を論じているという意味では、本論文で取り挙げる桑子の所論も今道と同様の地平に立っている。また、環境の激変が人

間性に加える影響に関して強い危機意識を抱いているという点でも、両者の問題意識の共通性を確認できる。<sup>2)</sup> だが、両者の間に幾つかの際立った差異があるのも事実である。そこで、まず、その違いを素描するところから桑子の所論の基本的な特徴を浮かび上がらせてみたいと思う。

今道と桑子の議論を対比するときまず明らかなのは、論究する対象の範囲の違いである。今道が専ら主題化していたのは、近現代の科学技術の所産として20世紀に新たに登場した技術連関という環境についてである。それに対して、桑子が主題化しているのは、自然環境への人為的介入全般についてであり、桑子の扱う対象は今道の言う技術連関を含みながらも、それを越える領域にまで広がっている。

また、第二の違いは、環境の激変がもたらした人間性の危機に対応しようとする方途の違いにある。今道が提言した方向性は、端的に言えば、人間環境の激変に応じた新たな倫理の構築によって人間性の危機に対処しようとするものであった。これに対して、桑子の議論は、公共事業をはじめとして環境問題に関わる様々なプロジェクトに対して、既存のアイディアの問題点を指摘し新たなアイディアを提示するという意図をもってなされている。桑子の議論の焦点は、個々人の行為の仕方に直接に関わる倫理という次元ではなく、個々人の行為が行われる場の整備という次元に当てられており、この点でも今道の所論と明確な対照をなしていると言ってよい。

以上のように簡略な特徴付けだけからも、桑子の環境論の包括性は自ずから浮かび上がるかと思われる。桑子の議論は、論究するテーマから見ても、また環境問題への対応として模索されている方途から見ても、基本的には今道の所論をカバーする包括性を備えた説得力のある議論だと筆者には思われる。では、桑子の所論の包括性、説得力は何に由来するのだろうか？

この点を考えるとき無視できない重要性を持っているのは、桑子と今道の環境論の第三番目の違い、すなわち各々の基底にある人間観、人間存在論の違いである。既に触れたように、今道の『エコ・エティカ』が問題にしていたのは、環境の激変が人間の意識、精神性、こころの成り立ちを危うくするということであった。そうした問題意識の背景には、意識、精神性、こころこそが人間性の本質であり、その本質は、さらに突き詰めれば、人間の時間性にあるという人間観が据えられていた。これに対して、桑子が強く主張するのは、人間の身体性、空間性こそ人間存在を構成するより根源的な契機であるという点である。むろん、桑子も人間の時間性に関わる諸契機を等閑視しているわけではない。だが、そうした契機は空間の中で身体として存在するという人間の最も基礎的な在りようから派生する二次的なものと捉えられている。このように桑子の所論では、人間はその基底において身体的な存在であり、空間的な存在であ

ると見る視点が貫かれているが、環境に関わる諸問題を扱うのにこうした人間観が有利に働いていることは、容易に推測され得るところだと思われる。

さて、以上、今道の所論との対比において桑子の環境論の基本的な特徴を予備的に素描したが、以下次節以降では、このような特徴付けを踏まえて桑子の環境論のヨリ踏み込んだ検討を行いたいと思う。その際に中心となるテーマは、

- (1) 桑子の所論に絞ってヨリ立ち入って見た場合、身体性と空間性に主眼を置いて人間の在りようを捉えるその人間存在論はどのようなものと見るべきなのか？
- (2) また、その人間存在論の視点から、環境に関わる具体的な諸問題について桑子はどのようなアイデアを提示しているのか？つまり、桑子の人間存在論はその環境思想にどのように生かされているのか？

これら二点であると言ってよい。<sup>3)</sup>

## 2 「身体の配置」と「空間の履歴」というキーワード

本論文冒頭の要約で触れたように、桑子の環境論は、一面では、中国や日本の伝統思想に含まれていたアイデアを現代に生かすというモチーフによって特徴付けることが可能である。具体的には、中国の老荘思想や朱子学、日本の神仏習合思想や仏教的な世界観等を桑子は取り挙げ、それらを空間や環境に関わる思想として読み解く作業をしている。著作で言えば、『西行の風景』『空間と身体』『気相の哲学』<sup>4)</sup>がそうした研究を主題としているものだが、『環境の哲学』でも、西行、慈円、熊沢蕃山についてそれぞれ一つの章を設けられ、それらの思想に含まれている環境思想の現代的意義について考察されている。

これらの思想史的と言ってよい研究は、桑子の人間存在論の背景をなす研究であり、その人間存在論の奥行きを詳細に見定めるためには吟味する必要のある対象である。だが、桑子の人間存在論は、思想史研究のエッセンスをテーゼとして掲げるような形で提示されてもいて、思想史研究から切り離しても理解可能である。つまり、その人間存在論と思想史研究とは相対的に独立したものとして扱うことができるわけで、本論文では、思想史研究への言及は必要最小限にとどめ人間存在論のエッセンスに的を絞るという便法を取って、論を進めてゆきたいと思う。<sup>5)</sup>

前節で既に触れたように、桑子の人間存在論の基調は、人間の身体性、空間性こそ人間存在を構成する根源的な契機であるところにある。身体性に対して精神性を、また空間性に対して時間性を対置するならば、それぞれの対概念のうち前者に重きを置く人間観を桑子が提

示していることは明らかで、ここには西洋思想の基調をなす理性主義的な人間観に対する批判が示唆されていると思われる。<sup>6)</sup>

人間存在の在りようを捉えるのに、空間の中で身体として存在するという、言わば当たり前の事実に敢えて焦点を当てる桑子の視線は、「身体の配置」というその所論のキーワードの一つに明確に示されている。「身体の配置」について桑子はさまざまな箇所で言及しているが、典型的な文章でこの点をまず確認してみよう。

わたしがかわる空間とは、身体の配置された空間であり、この空間でのこの身体こそ「わたしの身体」である。そしてこの身体に属する指によって「これ」と指されるのがわたしである。わたしはこの身体と身体が配置された空間から逃れることができない。わたしはこの身体と身体の配置される状況との統合である。(『環境の哲学』, p. 3)

「わたしはこの身体と身体が配置された空間から逃れることができない。」とあるように、「身体」と「空間」とは、「わたし」を成り立たせている最も基礎的な条件を指示するタームである。「わたし」という存在は、さまざまな規定を負い得るが、例えば社会的役割といった規定を考えてみれば明らかなように、それらの規定の多くを欠いても「わたし」は「わたし」であり続ける。しかし、少なくとも空間のなかに配置された身体であるという規定だけは、「わたし」の規定から捨象することはできない。「身体の配置」というキーワードが含意しているのは、まずは、このように身体性と空間性が人間存在を構成する不可欠の契機だということである。

だが、「身体の配置」というキーワードの含意は、これにとどまらない。「配置」とは、身体としての「わたし」と空間との関係を示す概念である。ここまでの脈絡から言えば、「わたし」が存在するという事は、身体として空間のなかに配置されているということである。ところで、「わたし」が配置される空間には、むろん他のさまざまな事物や人々も存在する。すると、身体としての「わたし」は、空間に配置されることによって、同時に他のさまざまな事物や人々との関係のうちに置かれることになるが、「身体の配置」というキーワードは、こうした事態も包含するような形で用いられている。桑子の言う「身体の配置」のもう一つの意味は、「わたし」という存在が他の事物や人との関係を不可避的に結ばざるを得ない関係的な存在であるということ、で、「配置」という関係性を示す概念にアクセントを置いて理解すれば、「身体の配置」は他なるものとの不可避的な関係性という観点から人間を捉えようとする含みも持つと見ることができるのである。次の引用は、他なるものとの不可避的な関係性というこのよう

な視角から「わたし」という存在の固有性、つまり人間の個性を捉えようとしているものである。

わたしの考えでは、人間は生まれ出たときから身体をもち、他のすべての事物、他のすべての人と特有の配置の関係でむすばれている。その身体を基礎に考えれば、個であることはすでに与えられているのである。同じ種に属する人間ではあるが、同じ個体ではない。こういう個体として存在するのは、それぞれの身体が異なるからである。だから、人間は生まれ出たときから個なのであり、その配置のなかですでに個性的な存在なのである。この配置での個性こそ、あらゆる個性の源泉にほかならない。(『感性の哲学』, p. 41)

「わたし」とは何か？自己とはどういう存在か？この引用文は、こうした問いに対する桑子の解答を明確に示している。「わたし」とは、身体として周囲の他の事物や人々との何らかの結びつきを持ちながら存在する個体であり、人間のあらゆる個性は、個体と他の事物や人々との結びつきの固有性、「身体の配置」の固有性にその基礎を持つ。これが、ここでの桑子の解答である。この引用文のみならずここまで確認してきたことを考えあわせれば、「わたし」という存在のこのような規定には、さらに、空間のなかに配置された存在という規定も付け加えられねばならないだろう。が、この点も含めれば、以上のような見解が、桑子の人間存在論の基底にある見解だと見てよいかと思われる。

さて、以上が、「身体の配置」に関わる議論である。「身体の配置」というキーワードが開示する地平での桑子の見解は、人間存在の根源的な身体性、空間性の指摘としてきわめて重要であると筆者にも思われる。だが、それは「身体の配置」という人間存在の原事実を専ら指摘するものであって、むしろ身体と空間の相関という「身体の配置」の枠組みだけで人間の経験、人間の生が過不足なく捉えられるというわけではない。身体として空間のなかに配置されて存在するという原事実が人間存在の最も基礎的な条件であるとしても、通常、人間の生はそれを基底とし、それ以上の何ものかとして成り立っている。「身体の配置」というキーワードだけでは括り得ない人間の生の次元を的確に捉えるためには、「身体の配置」とは別の枠組みが必要だが、桑子の人間存在論の場合、それは「空間の履歴」というキーワードを軸として組み立てられている。

では、「空間の履歴」とは何か？桑子の所論においては、このキーワードは「身体の配置」と相補的な関係にあるキーワードとして提起されている。その人間存在論において、両者は対の関係にあって相互の欠落を補い合うように組み合わせられている。「履歴」という言葉に暗示

されてもいるように、「空間の履歴」というキーワードには、「身体の配置」というキーワードによって開示される地平には立ち現れなかったもの、つまり人間存在の時間性や歴史性を捉える視角が提示されていると言ってよい。

だが、人間存在の時間性や歴史性を問題にするのに、桑子はなぜ人間の「履歴」ではなく「空間の履歴」を主題とするのだろうか？これは、当然生じてくる疑問なのであるが、このような問いに対しても桑子の答えは明解である。人間の経験の積み重ね——つまり、人間の「履歴」の形成——にとって従来あまり省みられることのなかった空間の在りようが重要な意味を持っている。そのような空間の在りようは「空間の履歴」と呼ぶにふさわしいが、それを主題化することによって人間の在りようも捉え直されるのではないのか？これが、桑子の解答の概要であると考えられるが、このことを桑子自身の文章によって確認してみよう。

人間はこの地球上で一定の範囲の空間をその行動範囲にしながら暮らしている。その暮らしのなかで経験を積み上げ、人格を形成する。経験と人格の形成を「いま」の時点で書き出してみると、それがそのひとの履歴となる。人間の履歴は、そのひとが活動し、暮らした空間と不可分な関係にある。どのような空間でどのように生きたかということがそのひとの履歴なのである。このとき、そのひとの経験は、そのひと自身にも依存するが、経験を積み上げた場所がどのような所なのか、どのような空間なのかによって経験の内容も異なる。だから、人間の経験は、経験する空間の内容と不可分である。(『環境の哲学』, p. 241)

人間の履歴が空間的な身体存在というあり方と不可分であるというとき、ここでいう空間は時間を組み込んでいる。空間のなかで生じた出来事は、その空間の履歴として蓄積されるからである。履歴をもつ空間のなかで、ひとは自分の履歴を積む。その履歴によって、ふたたび空間が履歴を重ねてゆく。人間の履歴と空間の履歴とを切り離すことはできない。(『感性の哲学』, p. 47)

両者相俟って、人間の経験（の内容）が経験の生起する場としての空間の（内容）と密接不離の関係にあることを指摘していることは、一読して明らかであろう。前者の引用文で「経験を積み上げた場所がどのような所なのか、どのような空間なのかによって経験の内容も異なる」という問題が提起されているが、「空間の履歴」がそうした問題を考えるためのキーワードであることも、概ね明らかだと思われる。

端的に言えば、「空間の履歴」とは、「空間のなかで生じた出来事」が「蓄積」されたものの

謂いである。むろん、「空間のなかで生じた出来事」をその空間の意味として保存し、空間に「履歴」があることを理解しているのは人間であって、空間それ自体ではない。<sup>7)</sup> だが、この点を補って考えてみるならば、「履歴をもつ空間のなかで、ひとは自分の履歴を積む。その履歴によって、ふたたび空間が履歴を重ねてゆく。」というような空間に関する擬人的な表現も無理なく理解される場所だと思われる。人間が自己形成し、経験を積み重ねてゆくのは、何らかの意味を負った空間——つまり、「時間を組み込んでいる」空間——のなかでのことである。これらの引用文は、まず第一には、この点を明示しているものと言えるだろう。

また、第二には、人間の経験が空間と密接不離の関係にあり、「人間の履歴と空間の履歴とを切り離すことはできない。」と言えるのは、そもそも人間が「空間的な身体存在というあり方」で存在しているからだということも、以上の引用文から読みとることが可能であろう。なるほど人間はさまざまな経験をし、自らの履歴を書き換えてゆく存在である。そして、人間が経験を積み、履歴を書き換えてゆくというのは、むろん時間の経過のなかでのことであって、その点において各人は各人固有の歴史を持つ時間的な存在だと言ってよい。だが、そうした各個人としての人間の時間性、歴史性も、そもそも「身体の配置」という原事実があるからこそ成立する。「身体の配置」という概念によって指し示される人間の空間性が、人間の時間性と歴史性を可能にしているのであり、決してその逆ではない。凡そこのような見解が、個人として見た場合の人間存在の時間性と空間性に関する桑子の洞察であると言ってよいと思われる。

いま第二点として確認した事柄は、「身体の配置」というキーワードが指示する事態の根源性とでも呼ぶべきものであろう。この第二点だけに着目すれば、桑子の人間存在論においては人間の時間性や歴史性が著しく軽視されているのではないか、という疑いが生じかねない。だが、実状はそうではない。「空間の履歴」というキーワードが示しているように、人間の経験が成り立つ場としての空間は、むしろその時間性、歴史性に焦点を当てて捉えられているが、それは個々人という枠を超えた次元での人間の歴史性、時間性の重要性を強く擁護することに他ならない。既に触れたように「空間のなかで生じた出来事」の「蓄積」が「空間の履歴」を構成するが、その多くは人間の行為や思想によって空間に付与されてきた意味、つまり個人の人生というタイムスパンを遥かに越える長い人間の歴史のなかで空間に刻み込まれてきた意味だからである。やや長くなるが、「身体の配置」と関係付けながら「空間の履歴」という概念を導入している箇所でこうした事情を確かめてみよう。

身体の置かれた空間を「モノと心を媒介するものとしての空間」ということができるのは、



自己をとらえるひとつの立場からの帰結である。それは、「空間でのこの身体の配置」を「わたし」ととらえる立場から導かれる。配置の概念によって、自己と世界との不可分な関係を示すことができる。さらに、この「空間」は歴史的なできごとによってさまざまな意味づけを与えられている空間である。つまり、空間は歴史性をもつ。空間の歴史性をわたしは「空間の履歴」という概念で表す。「履歴」はもともとひとりひとりの人間の履歴である。わたしの履歴は、わたしがどこで生まれ、どこで教育を受け、どこで働いてきたかというわたしの歴史の記録であるが、それは、あくまで現在のわたしの履歴である。わたしの現在の履歴に、わたしが経験した過去のできごとが書き込まれている。しかし、自己の履歴を可能にするものがある。わたしの入学した小学校は、あるところに位置し、その空間のなかにわたしが入学する以前から存続していた。その小学校の位置する空間は、さらに古い履歴を持つ。その空間の履歴との出会いによって、わたしの履歴がつくられる。わたしたちは履歴をもつ空間のうちであって、自己の履歴を形成するのである。この空間の履歴なしには、自己は存在しない。(『環境の哲学』, p. 21-p. 22)

末尾で「わたしたちは履歴をもつ空間のうちであって、自己の履歴を形成するのである。この空間の履歴なしには、自己は存在しない。」という強い表現で語られている事柄が、引用の前で筆者が指摘した事柄である。この点も含めてこの引用文は、「身体の配置」と「空間の履歴」とが対となってはじめて桑子の人間存在論が成り立っていることをよく示していると言えるだろう。桑子は、経験の主体としての自己を捉える際には、人間の身体性、空間性の根源性を強調し、他方、経験の成り立つ場としての空間を捉える際には、空間の時間性、歴史性を強調しており、このような二系列の議論を組み合わせることでその人間存在論を構成しているのである。<sup>8)</sup> 桑子の人間存在論において人間とその経験は、「身体の配置」と「空間の履歴」という二つのキーワードが指示する事態が交叉するところに存立すると言ってよい。

### 3 人間存在論と環境思想

前節では、「身体の配置」と「空間の履歴」という二つのキーワードを中心に桑子の人間存在論の概要について検討した。桑子は、この人間存在論を背景として環境問題に関わるさまざまな提言をしているが<sup>9)</sup>、本節では、具体的な環境問題に関わる桑子の言説を取り挙げ、その一端を検討してみたいと思う。筆者の主たる関心は、人間存在論の知見が環境に関わる問題を考える上でどう生かされているかを探ることにある。桑子の議論の多くは、具体的問題を念頭

に置きつつも既存のアイデアの批判的解剖と新たなアイデアの提示という、言わば思想の次元でなされているが、そうした作業と人間存在論の知見とがどう繋がっているのか、この点を若干ではあるが明らかにするのが本節の狙いである。

以上のような問題関心のために、本節では、テーマを人間存在論と関連が深いと思われる二つのテーマに絞り込みたい。一つは、ローカルに感じ考えることの重要性というテーマであり、これは「身体の配置」というキーワードと強く関係している。また一つは、風景の意味といったテーマであるが、こちらは「空間の履歴」とより強く連動するテーマである。これら二つのテーマに関わる議論は、実は相当程度重なり合うものである。それは、両者が同一の状況認識、同一の危機意識に端を発しているからで、これら二つのテーマは同一の問題の二つのアスペクトと理解することもできるかと思われる。両テーマの根底にあると推測される桑子の現状認識を見てみよう。

現代はさまざまな価値が普遍的であるという理由でグローバル化されてゆく時代である。風景はますます平板化され、類型化される傾向にある。そのなかで育つ子どもたちの人格も平板になり、また類型化されてゆくに違いない。だからこそ、身体に基礎をもつローカリティの重要性をわたしは主張するのである。なぜなら、この身体のもつローカリティこそ個性の源泉だからである。抽象的な自己から出発して個性を求める思考では、このような個性の源泉は得られない。(『感性の哲学』, p. 92)

この引用文から、さきに筆者が設定した二つのテーマを読みとることは容易であろう。まず第一のテーマに関連するものとしては、「身体に基礎をもつローカリティの重要性」という表現が見られるが、この引用文で「ローカリティ」と「グローバル化」、「ローカリティ」と「個性」や「抽象的な自己」との関係が問われるべき問題として浮き彫りにされていることは、明らかだと思われる。他方、もう一つのテーマに関わる言葉を拾えば、「風景はますます平板化され、類型化される傾向にある。」という一文が見られる。この表現には、平板化も類型化もされていなかった風景へのノスタルジーのようなものが感じられるが、このような点も含めて風景の意味を主題化する必要性をこの一文は示唆していると言えるだろう。

さて、第一のテーマだが、桑子が「ローカリティ」を「身体の配置」と関連付けて捉えていることは、この引用文からも窺える。「この身体のもつローカリティこそ個性の源泉だからである。」という一文は、「身体の配置」を論じる際に引用した「この配置での個性こそ、あらゆる個性の源泉にほかならない。」という一文のバリエーションと見て差し支えないと思われる。

実際、「身体の配置」と「ローカリティ」の関係をヨリ明確に記している文章もある。次の引用文には風景の問題も登場するが、桑子が「ローカリティ」をどのような文脈で考えているかを理解するためにその点も含めて引用しよう。

わたしが身体であることによって、わたしは空間のなかで一定の場所をもつ。場所をもつ身体がローカリティの原点である。ローカルな身体的能力としての知覚によって捉えられる空間の相貌が風景である。もっときちんといえば、風景とは、一定の配置をもつ身体に対して全感的に出現する空間の相貌である。風景のなかで、自己は自己がローカルな存在であることを知る。(『感性の哲学』, p. 75)

「風景のなかで、自己は自己がローカルな存在であることを知る。」とあるように、風景の問題も「ローカリティ」に関わる問題の重要な一部と見ることもできる。だが、風景に関わる問題は、既に触れているように第二のテーマとして別に論じることにはしたい。ここでまず確認したいのは、「ローカリティ」が「身体の配置」から捉えられているということ、そして前節で見たように「身体の配置」とは人間存在の最も基礎的な条件を構成するものであること、こういう事柄である。これらを考えあわせるならば、桑子にとって「ローカリティ」とは、身体をもって一定の場所に存在するという原事実に由来する人間の根源的な在りようとも言えるかも知れない。

だが、もしそう見てよいとすれば、桑子の所論で「ローカリティ」は、「身体の配置」と相当程度重なり合う概念だということになる。では、何故桑子は「身体の配置」に加えて「ローカリティ」という概念を敢えて用いるのだろうか？その理由の一つは、桑子の所論において「ローカル」は「グローバル」の対概念として重要な位置を持つという点に求められると筆者には思われる。「ローカルであること」と「グローバルであること」との対立と調和というテーマは桑子が強く意識しているテーマの一つであるが、こうしたテーマを扱うことにおいて桑子の議論は現実の環境問題に近づいてゆくことになる。<sup>10)</sup> アクチュアルな環境問題における「ローカル」と「グローバル」の対立と調和という問題に関連して、桑子は次のように言う。

「グローバル」は「ローカル」に対して、「地球規模で考え、足下から行動せよ。think globally, act locally」という標語もあるように、対照的な意味で用いられている。地球環境問題は、地球規模の問題であることから、グローバルな思考が求められるのは当然のことであろう。ただ、問題なのは、ローカルということが、グローバルな理念の実行の場として理

解されていることである。このことは、全地球規模の行動原理がどこでも同じように実行されるべきだということを暗に意味するであろう。ところが、現在問題になっているのは、グローバルな思考にもとづく政策が地球上どこでも一律に適用されることから発生する問題、すなわち、「think globally」と「think locally」の対立の問題である。（『環境の哲学』、p. 104）

末尾の文章にある「think locally」は、むしろ「act locally」の誤植ではなく、桑子の意識的な措辞であると思われる。ここには、「地球規模で考え、足下から行動せよ。」という標語に対する批判が含意されている。つまり、この標語は、その内実から見れば、「地球規模で考えたことを足下の行動で実現せよ。」ということであるが、ここには「足下で考える」という視点が欠落しているというのが、桑子の批判の眼目であると言ってよい。このように環境問題における思考のグローバリゼーションの過度の進展に対する警告がこの引用には含意されていると見ることができる。

こうした桑子の主張をどう評価するかは、念頭に置かれる具体的問題の質や論者のスタンスの違いに応じて意見の分かれるところだと思われる。ただ、「think globally」と「think locally」の対立という問題は、現今の環境問題を考える上では避けて通れない問題である。<sup>11)</sup> その点を明確に指摘しているだけでも、以上のような桑子の指摘には意味があると思われる。だが、その所論のメリットは、これに尽きるわけではない。「ローカル」と「グローバル」に関するこうした指摘は、既に若干触れたように「身体の配置」をはじめとする人間存在の基礎的条件への洞察から導かれている。こうした哲学的洞察に支えられているがゆえに、桑子の所論は、時代状況への反応といったもの以上の射程を持ち得ていると筆者には思われるが、この点に桑子の所論の、もう一つのより重大な意義があると言ってよい。「ローカルであること」と「グローバルであること」とは、そもそもどういう事態であるかを分析して、桑子は次のように言う。「身体の配置」に由来する「思考のローカリティ」を、「身体からの離脱」を前提とする「グローバル」な思考と対置したうえで前者を強く擁護する桑子の一文である。

思考のドメスティケーションは、思考の局所性を要求する。身体はこの地球上の他の事物と全体的な配置の関係にある。この身体こそ、思考のローカリティの原点であり、世界の知覚は、このローカルな地点から行われる。そしてまた、人間に理性があるならば、それはこの身体からの離脱の可能性として、ローカリティを括弧に入れることで成立する。その意味で、理性はグローバルであることとユニバーサルであることの可能性の条件である。それに

しても、このグローバルな視点とユニバーサルな思惟とは、身体的ローカリティから独立にはありえない。(『環境の哲学』, p. 183)

人間は理性的存在であり得るかも知れないが、まず疑いなく身体的な存在でもある。理性的であるためには、身体から離脱した視点に立つことが必要で、そうであってはじめてグローバルでありユニバーサルであることができる。だが、そうした視点に立てたとしても人間が「身体的ローカリティ」から逃れられるわけではない。このように指摘する桑子が見据えているのは、根源的には「ローカル」であることから逃れられないにも関わらず、そのことに無自覚なまま「グローバル」な思考で考える現代人の引き裂かれた存在の在りよう、思考の在りようである。このような現代人の姿を見つめるなかで、「ローカル」と「グローバル」の対立と調和といったテーマに関して、桑子は、両者の調和を望みつつも一貫して「ローカル」な視点の重要性を主張している。その背景には、思考という次元においても、また世界内で生じるさまざまな出来事の次元においても、一元的な「グローバル」化が確実に進行しつつあるという現実の動向が影を落としているように思われる。

さて、以上が本節の第一のテーマであるローカルに感じ考えることの重要性に関わる議論である。この検討の過程で、「ローカル」な視点を重視する桑子の所論が「身体の配置」という人間存在論の基礎概念に多くを負っていることが、凡そは明らかになったと思う。では、第二のテーマである風景の意味に関して人間存在論の知見はどのように関与しているのだろうか？

この問題が、「身体の配置」もさることながら、「空間の履歴」というキーワードとより強く連動する問題であることについては既に言及した。また、第一のテーマの検討に際して、風景の意味の問題を「ローカリティ」の問題群の重要な一部とみなすことができるという点についても既に触れた通りである。このような事情から、風景の意味というテーマがローカルに感じ考えることの重要性を別の角度から補強し得る可能性を持つテーマであることが予想されるかと思われる。この点も含めて風景の意味について若干の検討を加えるために桑子による風景の端的な定義付けを取り挙げてみよう。

風景とは、それぞれの配置をもつ身体へと全感覚的に出現する空間の相貌である。しかも、この風景は、たんに空間的なものというだけでなく、歴史的な時間を含んでいる。つまり履歴をもっている。この風景こそ、世界と人間を区分し、またつなぐものであるとわたしは考える。(『環境の哲学』, p. 182)

この引用文から、まず「身体の配置」と「空間の履歴」という二つのキーワードによって風景というものが捉えられていることを確認できる。これら二つのキーワードのうち風景の意味という問題に関しては「空間の履歴」を相対的に重く見るというのが桑子の基本的なスタンスである。桑子がそう考える理由は、空間の意味と言っても、「履歴」の乏しい空間には貧弱な意味しか宿らず、その空間と接する身体に立ち現れる風景も、また貧弱なものでしかない。それゆえ、「空間の相貌」と呼び得るほどの風景という現象に「空間の履歴」は欠き得ない、といった点に求められている。<sup>12)</sup> 先に「ローカリティ」の検討に際して、「風景のなかで、自己は自己がローカルな存在であることを知る。」という一文に注意を喚起したが、こうした自己認識のよすがになり得るような風景の意味は、「空間の履歴」という観点なしには捉えられない。端的に言えば、こうした見解が、桑子の基本的な見解であると解される。

さて、このように見ることによって風景と「ローカリティ」の問題との連関もより鮮明になると思われる。風景は、自己認識に強く関与するという点で身体とは別の意味においてではあるが、身体と同様「ローカリティ」の基礎にあるものと見ることができるのである。これを逆に言えば、このような自己認識に関与しないような空間の相貌は、「履歴」と意味に乏しい、その意味では風景とも言えないような風景だということになろう。桑子が、風景の意味という視角からも「ローカル」に感じ考えることの重要性を強調するのは、一つには以上のような理論的な背景があつてのことだが、また同時に、ローカルな自己を認識するよすがとはなりえないような風景が眼前の現実として現に広がりつつあるためでもある。最後にそうした桑子の現状認識をあらためて確認して本稿を閉じたいと思う。次の引用文は、世界規模における空間の再編の動向とグローバルでありユニバーサルであると主張してきた西洋産の近代的理性をととにも批判する文脈に置かれた文章であるが、そうした文脈の中で風景を捉える視点を提示しているところにも桑子の所論の射程の長さが窺えると思われる。

効率や利便性を最高の価値とする思想では、空間の意味がローカルであることを越えて、より普遍性が志向されるために、どのような空間にも類似した意味づけが与えられてしまう。日本列島が同じ価値基準で計られ、その価値を目指して改造されるならば、日本の景観は地域性を消去するような方向で再編されてゆくであろう。これは世界規模でも同様である。価値のグローバリゼーションによって世界の都市は似たようなものになってゆく。(『環境の哲学』, p. 110)

さて以上、足早に桑子の所論を検討してきた。注(3)で記したように、以上のような輪郭

を持つ桑子の環境論の全体的な評価は、積み残された課題として残ったままである。が、それは別の機会にあらためて論じることとして稿を閉じたいと思う。

## 注

- 1) 『川村学園女子大学研究紀要』, 第12巻第3号, 2001年, p. 119-p. 131を参照願いたい。
- 2) 桑子の危機意識は、主として、激変した環境が若年層の人間形成に対して及ぼす(と想定される)悪影響へと向けられているが、この点については、例えば次のような箇所を参照願いたい。桑子敏雄, 『環境の哲学』, 講談社学術文庫1410, 講談社, 1999年, p. 16-p. 19。桑子敏雄, 『感性の哲学』, NHKブックス914, 日本放送出版協会, 2001年, p. 39-p. 42。なお、本論文では主としてこの二つの著作を参照しているが、両著作からの引用、あるいは参照箇所の紹介は、以下では、本文中で括弧を付して著作名とページ数を記すという形式で行いたい。
- 3) 本来、これらに加えて、桑子の環境思想はどう評価されるべきなのか、という問題を論じる必要があることは言うまでもないのだが、本論文ではその手前にある作業に主眼を置きたい。
- 4) これらに関する詳しいデータは引用文献・参考文献の項を参照願いたい。
- 5) この点に関しては、桑子が西洋思想史へ言及している箇所の本論文での扱いにおいても同様である。やや蛇足めくが、その環境論において桑子は、比較的批判的なスタンスで西洋思想史の所論を取り挙げることが多いが、桑子は元来、そして現在もアリストテレスを中心としたギリシャ哲学の専門的な研究者でもあることを付言しておきたい。
- 6) この点はプラトン哲学に対する桑子の批判において顕著に認められる。『感性の哲学』, p. 97-p. 104を参照願いたい。
- 7) 「空間の履歴」の具体例に言及して、例えば次のように言われている。「空間の履歴はいろいろな点からみることができる。路傍の標識や記念碑、土地の登記簿、こどもの絵日記などは、直接空間と結びつく記録である。履歴は言語化され履歴書となる。言語と履歴とは深くかかわっている。空間は言語によって意味づけられる。」(『環境の哲学』, p. 34)
- 8) きわめてラフに言えば、自己と空間に対するこのような性格付けは、そのいずれをとっても多くの人間存在論の強調点と逆であるように思われるが、このことが桑子の人間存在論に独自の性格を付与していると言えるかも知れない。
- 9) 桑子が取り挙げるテーマは、環境政策、地名・住居表示の問題、社会資本整備、公共事業等々多岐にわたっている。より細かく見れば、「長良川河口堰」「池子の森」「織田が浜」等、環境問題をめぐって現に対立が生じた問題、またテーマパークやニュータウンなどをめぐる現実的な諸問題についても論じられているが、本論文ではそれらを個別的に主題化することはしない。
- 10) このテーマは、むしろ環境問題のみならず現在のさまざまな領域において焦眉の急となった感のある問題である。「ローカル」と「グローバル」に関わる桑子の議論は、人間存在の基本的な在りようを踏まえた議論として、また、思考の道具である概念の吟味を踏まえた議論として、他の領域での諸問題を考える上でもさまざまな示唆を与え得ると筆者には思われる。
- 11) 桑子は、地球環境問題ばかりでなく、身近で具体的な環境問題においてもこの二つの思考の次元を混同するところから無用な混乱が起きていると見ているが、この点については、例えば『環境の哲学』, p. 215-p. 222を参照願いたい。

- 12) 桑子は、こうした観点から「風景の奥行き」「風景のひだ」といった問題、つまり風景の持つ文化的意味に言及しているが、その点については『感性の哲学』, p. 62-p. 70 を参照願いたい。また、この点に関連して風景への「愛着」というローカルな視点の文化的意味にも言及がなされているが、これについては『感性の哲学』, p. 144-p. 155 を参照願いたい。

#### 引用文献・参考文献

- 桑子敏雄, 『感性の哲学』, NHK ブックス 914, 日本放送出版協会, 2001 年  
桑子敏雄, 『環境の哲学』, 講談社学術文庫 1410, 講談社, 1999 年  
桑子敏雄, 『西行の風景』, NHK ブックス 857, 日本放送出版協会, 1999 年  
桑子敏雄, 『空間と身体』, 東信堂, 1998 年  
桑子敏雄, 『気相の哲学』, ロンド叢書 6, 新曜社, 1996 年  
桑子敏雄, 『エネルギー』, 東京大学出版会, 1993 年